Ⅳ

座談会 公民館10年を語る

Ⅳ 座 談 会

公民館10年を語る

昭和63年2月6日　福生市公民館

司　会　皆さんこんばんは。本日は大変お忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。福生市公民館もお陰様で、昨年6月開館10年を迎えました。

また、開館10年の節目に優良公民館として、文部大臣表彰をいただくことができました。厚く御礼を申し上げます。

本日は「公民館の10年を語る」ということで皆さんのいろいろな思い出や御意見をお伺いしたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

ところで、公民館ができるきっかけは、どうだったんでしょうか。公民館をつくる会があったと聞いておりますが。

出　席　者
奥田泰弘氏（公民館運営審議会委員）
佐久間登世子氏（サークルななよん）
宮岡一雄氏（前公民館運営審議会委員長）
村野栄子氏（手づくりの会）
村野雅義氏（公民館をつくる会）
降幡智子氏（市民コーラス）
司会　黒田登　（公民館館長）

村　野(雅)　公民館をつくる会のメンバーだった村野雅義です。ぼくらが公民館をつくってくれと市に要望したころは、名前すら知っていなかったですね。三多摩には、公民館活動の活発な市もありましたが、福生では公民館というものがどんなものかわからない時期だったわけですね。

これはその時の裏話なんですけれど、公民館建設の署名を集めているときに、次の日に警察の方から、「どういう趣旨で署名を集めてるのか」というふうな問い合わせがあったことがありました。

司　会　そうなんですか。若い者大勢が集まって何をやってるんだ。そんなところですね。でも、公民館の名前さえ知らないところに良くできましたね。ただ、ほしいほしいではできないですよね。

村　野(雅)　そうですか。これはいろいろな人たちの理解があったからだと思うんですけども、要求のないところにつくることはないわけですからね。その要求は青年の間から最初出てきたんですけど。

毎年の成人式をきっかけにしてできた自主サークルと元からある青年団との間で活動場所の取り合いをするような状況で、いろいろな苦労が、先輩たちにあったみたいですね。

司　会　そうですか。新しい型の青年サークルが生まれてきたため、活動場所の確保が難しくなってきたということですね。

村　野(雅)　そうです。それじゃ大変だということで、サークルと青年団をまとめた青年団体連絡協議会が昭和４３年にできたんです。その中で青年団体が活動する場所をつくってくれと要求し、それでできたのがいまの福祉会館だったわけですね。これは必ずしも社会教育のために建てられた施設でなかったので、いろいろ混乱があったり不便でした。それでも音楽や演劇、スポーツサークルなんかも含めて、一番多くなったときで１１団体、それこそ２００名を超える青年たちが活動したわけですね。

司　会　使いかっては良くなかったけれども、青年たちの何かをしたいという力は大きかったわけですね。

村　野(雅)　そうですね。そんな中でこれからもっと活動を発展させていくには、どうしたらいいかということを考えているうちに、社会教育法に基づく公民館というのがあるのを知って、それの研究会を定期的に持つようになったわけですね。

その中で、青年層だけでは始まらないということで、婦人グループだとかの協力を得ながら福生の公民館をつくる市民の会をつくったわけですね。

司　会　自分たちのものをつくるということではなく婦人とか一般成人も利用できるものをつくるという考えであったわけですね。だれもが使い易いものを目指すというところですね。

それはいつごろからですか。

村　野(㈱)　それは昭和４８年でした。月１回集まり研究を深めました。１年ぐらいいたしまして、その成果を社会教育課に要望書として出し、それと市議会の方には公民館をつくってくれという請願をいたしました。

千何百名という署名も集まって、また福生始まって以来の委員会傍聴にまでつめかけ、次の議会で請願採択されました。それでもいつになるかわからないという実情でしたね。そのうちに福生市文化連盟という昔から活動されていた団体が早期予算化の要望ということで出して下さり、昭和５０年の３月に予算計上されたわけです。

司　会　そうですか。４８年に公民館をつくるための勉強会を発足させて、２年たってようやく建設のめどがたったわけですね。それはどんな構想のものだったんでしょうか。

村　野(㈱)　そこでは大きなホールと一緒に公民館を併設するというふうな青写真になっていまして、１４億円余りを使って２年度にわたって建てられるということでした。

その間のひとつのエピソードですが、議会では最初は市民会館建設特別委員会だったわけですね。それが皆で傍聴を繰り返すなかで、市民会館及び公民館建設特別委員会と名前がかえられ、議員さんだとか各層にも、「公民館だとよ」と理解してくれる方がふえてきたわけですね。

司　会　当初は市民会館という名称だけだった。ところが皆さんの熱心さが伝わって「公民館だとよ」というふうに皆さんが理解をして下さったわけですね。

議員の皆さん方はそんなことで理解をして下さったわけですけど、市民の方はどうだったんですかね。

村　野(㈱)　そうですね。そこで私たちは、市民の方が公民館のイメージがよくつかめないということから、公民館とはどんなものかを詳しく書いたパンフレットをつくりました。

それと、使用規則をつくる段階になって使用料のことが出てきましたので、次に第２弾の無料化のパンフレットをつくりました。

当時、各自治体が財政危機という時代だったし、受益者負担だという議会の意向がありまして難しい時期でしたが、そこでも熱心に運動するうちに、やはり原則として無料にすべきだということが関係者に御理解いただいたわけです。

こんなことで、昭和５２年に待望久しかった公民館、大・小ホールのついた公民館ということで、市民会館と併設でめでたく建てることができたわけです。

司　会　公民館ができるまで、いろいろ皆さんが御苦労されてきたわけでございますけれども、この当時ですね、他の市の公民館建設の状況はどうなっていたんでしょうか。奥田先生は中央大学で公民館など、社会教育の研究をされているということで、よろしかったらこの辺もお聞かせいただければと思っておりますけれども。

奥　田　公民館運営審議会委員の奥田です。

私はそのころ昭島に住んでいました。昭島にも昭島・公民館をつくる会というのができていたんです。

それは正式にできたのは昭和４６年の４月だったと思います。４５年の秋に５人の青年と社会教育主事をやっている職員の人と、それから私も加えていただいて７人で相談を始めたのが昭島・公民館をつくる会の始まりだったんですね。

さっき公民館という名を知らない人ばっかりという話が出ましたが、昭島でもこんなエピソードがあったんです。

昭島でも青年たちが、公民館をつくってほしいという署名とカンパの運動をやったんですが、青年がこんな運動をしているなんていうのは非常に奇特なことだというふうに市民の方々には映ったんでしょうかね。すごいカンパが集まりました。あの当時で５万円余りにもなったんですね。署名もね、さっき千幾らっておっしゃったでしょう。村野さん。

村　野(補)　はい、福生では1,２００～1,３００・・・。

奥　田　じゃあ、うちの方も1,３００くらいだったでしょうかね。ほとんど同じくらいだったという記憶がありますから。とにかく予想以上で、それで青年たちも気をよくして回っていたんですけれども、署名してもらって「ほら、カンパだよ」、「どうもありがとうございました」と帰ろうとしたら、「ちょっと待って、ところで公民館って何よ。」とこう聞かれたわけです。（笑声）

それで公民館の話を青年たちが一生懸命説明したら「そうか、よくわかった。それじゃ市民会館と同じなんだね。」と言われて、またギャフンときたという・・・（笑声）

それとさっきの市民会館建設特別委員会ですが、昭島も全く同じです。こちらでもかなり運動して、そこのところぜひ名前をかえてほしいといって「および公民館建設特別委員会」というようにかえてもらったんです。

もう一つ、昭和４８年ということですと、そのころ、厳密には昭和５０年１月なのですが、東村山がやっぱり公民館をつくる会をつくっているんですが、当時、昭島と福生と東村山と３つの市で公民館をつくってほしいという運動が行われていまして、これがまた三者三様なんですね。

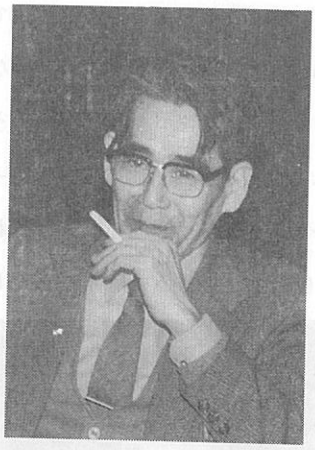
昭島は青年中心なんです。それで婦人の方にも入ってもらおうとかなり努力して、やっと婦人とつながっていましたが、中心は青年でしたね。

福生はさっき言われましたように、初めは青年が中心で始まっていますよね。だけれども、最後は２５０人、７０団体ですか。これはもうおそるべき広がりで、青年も婦人も一緒です。

ところが東村山は、ほとんどが婦人なんです。もともと東村山の公民館をつくる会の母体は、婦人学級なんですから、婦人が母体で広がり、婦人が青年を少し引き込んでいるという感じですね。そういう意味でも三者三様です。

司　会　お話を聞いていますと、当時の福生の青年の力と言いますと、活動のうまさと言いますか、まとまりみたいなものがいかに強かったかがわかりますね。ところで宮岡先生、先生はそれ以前から社会教育の関係では講師でいろいろお手伝いいただいていましたね。そんな関連で建設についてもいろいろとご存じだと思いますが。

宮　岡　私は公民館建設には直接かかわっていなかったのですが、そういう意味では村野さんたちの青連協のね、活動の方向がよかった。



それからもうひとつは、婦人団体というのは比較的この西多摩地域ではね、物の考えの古い方が多かったんです。ところが、たまたま福生の婦人活動をされている中枢のお方は、みんな新しい感覚をもっておられた。年配でありながらね。

それから先ほど村野さんがおっしゃったように、文化連盟、これの素地があったということ。それからもうひとつは、文化財調査会というのがね、文化連盟のバックというかね、そういうので非常に文化的な思想が文化連盟の中にも定着していた。こういうようなところが全部うまくかみ合ったんじゃないでしょうかね。

それですから、昭島に先鞭をつけられても、福生が追い越して館の建設を達成できたというのは、行政の中枢の方々の物の考え、受け止め方も正しかったけれども、うまく青連協がそれを引き出した、埋もれていたものをまとめていったと、こういうことが相当あるように思いま

す。端から見ていてね。

村　野(俳)　大分青年の力を買い被られて・・・（笑声）・・・やっぱり宮岡先生が言われたように、ＯＢの方の的確なアドバイスのお陰だと思うんです。今日おいでの手づくりの会の村野栄子さんなんかも、その中のひとりなんですけれども。やっぱり青年だけではね、ただまっしぐらで、こうした方がいいとか、福生はこういうところなんだという地域の特色のよさも、悪さもひっくるめて、雰囲気みたいなものをそれとなく教えていただいたんで、大きな過ちを犯さないで済んだというだけだろうと思うんですけれども。

司　会　福生の場合、いろいろな人たちの力がうまい具合に連動して、意外と早期に公民館が完成したというわけですね。そのとき皆さんは完成をどんな気持をもって迎えられたんでしょうかね。

宮　岡　私はね、開館のときには招待されて出たんですよ。いやいや、こう立派な会館ができたのでは、さて、これからどうしていったらいいのだろうかなんていうことが一番初めに頭に浮かびましたね。これにどう中身を入れるんだろう。そして、村野さんたちの活動をいろいろと聞いていましたし、こういう熱心な人たちに任しておくだけでいいのかな、なんていう感じでしたね。それからもう一つ、私は福生で生まれておりませんからね、活動の場面というのがなかったんですね。地域社会で、活動したくても・・・。契機がつかめないんですね。自分の同好会みたいのですね、身近な何人かで交流ができるんだけれどもね。町へ出て皆さんと一緒に、横のつながりというかそういう場を持てない、したいんだけれども顔見知りがあまりいない。学校と家との間だけを通っていましてね。恐らくそういう人たちが随分いるだろうから、そういうことのためにも、それぞれ動ける人は動かなきゃいけないのかなと、おぼろげながらもそういう感じを持ちましたね。

村　野(栄)　こんばんは。手づくりの会の村野栄子です。

私は漠然としていますけれどもね、村野さんの仲間の青年団が本当に必死になって、他府県まで視察に行ったりして、公民館をつくるために本当に涙ぐましい活動を、近所で見ていて感激でした。それだけ努力されて完成した公民館だからその影響で私も何かしなくちゃと、感激でもって私も活動したわけなんです。青年たちの力に動かされて、自分も何かしなくちゃと思われた方も多いんじゃないですか。

宮　岡　村野雅義さんに伺いたいんですが。

それだけのがんばりというか努力をしてきて、開館したときの感想を聞かせておいてよ。

村　野(雅)　目に見えないものを創造するというのも苦労がいったんですけれども、それが目の前に現実にできてみて、果たして使いこなせるかどうかかっていうかえって心配というのが、先にたちますね。学芸大の小林文人先生なんかにもつくるときに3割の力でつくらして、7割は開館以後にとっておけよと言われたんですけれども、ないものを要求するというのは、皆気持ちが一致しやすいんですけれども、いざできてみると、開館すれば自然に住民同士が交流するかというとなかなかそれができなかったようですね。上手に利用していくということの難しさは感じましたね。

司　会　村野さんの努力は大変だったと思うんですよ。いま市民の人たちが、本当に楽しくね、朝は9時から夜は１０時まで毎日大勢の人が公民館へ来て、１日を過ごしていただいていますけれどもね。公民館がここまでたどりつくまでは、いろいろな事があったんでしょうね。

ところで、手づくりの会やサークルななよん、市民コーラスの皆さんは公民館ができる前から活動していたということでございますけれども、公民館ができて皆さんはどうでしたか。

その辺をお話いただきたいと思うんですけれども。

佐久間　公民館ができる前は、活動するには不自由でもいろんな人とが知り合えたり、つくるという目的があったから、そのための人の交流というのが多かった気がするんですが、正直いって完成してからある期間、素敵なお部屋に入れて、これでもう場が確保されたというような安心感が出てきて、気持ちのたるみみたいなものが出ていましたね。

やはりハングリーでいるというときの方が、人というのは人を求めるし、仲間も求めるし、がんばらなくちゃがんばらなくちゃと思うところがあるのかなあ、ぜいたくな話だと思うけど。

宮　岡　その点が一番、何というかな、社会教育活動に参加している一員として考えなくてはいけないところだと思うんですね。

公民館活動をする上で、地域社会にどう自分が位置づけられるか。そして、おおげさに言えば、地域社会の発展というか、地域に自分がどう役立っているかというところを、押さえておかないと。この点を少しは考えていかないといけないんじゃないでしょうかね。

大変なことですけれど。それでないとね、単なる遊びに落ち入っちゃうのではと思うんです

よ。趣味一辺倒に。カルチャーセンターに行けばいいという説が、一時もっぱらありましたよね。そういうことを公民館を利用させていただく上では乗りこえないと、市民権を得られないと思うんです。本当の意味で地域とつながっていく、人と人とがつながっていく努力をしていかなければならないと思いますよ。

降　幡　そういう意味では、私たちのグループをつなげて下さったのは職員方だったんですね。そのパイプ役をして下さったおかげで私たちは今度の2月１１日、１１回目のコンサートを開きます。５２年度に1回目のコンサートに行ったとき「とにかく小ホールを一回使ってくれなくては困るんだよ」と言われたんです。私たちは「困ると言われてもコンサートやったことがないからどうしょうもない」と言ったら、とにかく第1回目は会館の人たちがいろんなところの知っている人をヘルパーにしてね、そしてお手伝いするからといって下さったんです。そのときに外のグループが、私たちはそのとき知らなかったんですけれど、レコードコンサートのグループが、司会とかプログラミングも全部やって下さったわけです。

それからは、いろいろなサークルとジョイントしてコンサートを行いました。その間にサークルななよんの方とのパイプ役も公民館の職員の方にしていただいたり、それから民謡の会の方とか、手話の会、それから子供マンガクラブ、それからタンゴの方たちというふうに、本当にこの中で活動している方々との横のつながりというのを、職員の方が仲立ちになってやって下さったんですね。

コンサートが１１回も続けられるというのは、私たちの力ではなくて、やっぱりこういう器があってできるんですね。なるべくいろんな方とのつながりをもっていればこそ、できたんですね。だから他市の合唱グループをお客さんに呼ぶことはいくらでもできるんですけど、私たちはあえてそれをしないのは、他市よりも福生の中で、活動をしている人たちとつながりたいという気持を持っているからなんです。

村　野㈱　職員の仲立ちっていうか、職員も一緒に楽しみながら、仲間みたいな感じでやってくれたのがいいんですよ。福祉会館の２階で、まんじゅうづくりをしたり、うどんづくりをしたりね。

うどんづくりも職員の人と話しているときにね、あんまり食文化が進んじゃってるから、もう少し日本的なものをやろうよなんて話が出て、それじゃ「うどんづくり」をしましょう。気

軽に出てきたんですよ。グループ同志のつながりも大切だけれど、職員とのつながりも大切ですね。

司　会　先ほど村野雅義さんから、つくる力が3割、つくってから動かす力が7割というようなお言葉もございましたが、利用者と館が一体となっていることが大切なんですね。

宮岡先生、奥田先生には、公民館へ講師としておいで願っていることもありますが、その辺のところはどうなんですかね。

宮　岡　私が自然観察で一番に考えたことはね、よく、人によりけりなんていうじゃないですか、公民館活動でもグループをつくるとき、可能な限りグループに広範囲に年齢を抱え込むことがひとつの手法ではないかと。そうすれば時代的流れを常に継承していけるだろうという考えがあってね。それがひとつあったんですよ。

それからもう一つ、自然観察で植物の名前を覚えるというよりは、自然のなんといったらいいのかな、ダイナミズムというか、自然の摂理というのか、偉そうに言えば、今そういうものを感じられない時代だから、こころに感性みたいなものをもっていてもらいたいなと、その辺のことなら、一緒にみんなで遊びながら学べるかなと、そういう感覚でしたよね。自分の趣味の範囲だけでとらえていちゃいけないなと。そうじゃなくって、全体をとらえながら参加したいなというのが私の願いで、そういう姿勢でやってきました。

降　幡　私がここを使わせていただいてから、公民館の方や先生方に何回となくグループに来ていただいて、公民館とは何か、社会教育とは何かとか、サークルを通してどういうことを学んでいくのか、公民館を使うサークルはどういうことをしていってほしいのかということを大分お話いただきました。

宮　岡　ぼくも大分したね。思いを込めながら。

降　幡　宮岡先生にも大分私たちのサークルへ来ていただいてお話していただきましたね。

村　野(米)　私がこういう活動に入ったというのもね、宮岡先生のそういうお話から、だんだん勉強させられたところが大きいんですよ。

初めは植物のことだけだったけど、先生の指導で自然の理というものがわかってきて、それが手づくり、自然食のことを考えるようになって、地域の食文化のことまで考えるようになれたわけですから。

宮　岡　私なんか社会教育なんて全然知らないのに・・・。それでは、なぜ知らないのにそう

いうところへ講師づらをしていったり、公運審にかかわったりしたかと言えば、社会教育というのは思い込みが大切だと思っていましたから。思い込みのない社会教育へのかかわり方では役にたたないと思っているんですよ。だから、知識の面ではだめだけれども、思い込みの面では結構対等にいけるじゃないかと、そんな大それた気持があったですね。

降　幡　趣味で終わらせちゃいけないというね。すごく大仰に言えば、福生市の文化を広げるなんてことをよく会の方々と、先生方もですけれども、そういう話を良くしましたね。これを思い込みということかしら。

カルチャーセンター的な自分のために何かを学ぶということで終わらせるんじゃなくて、私たち利用させていただく側が、その他の利用者や職員や地域の人々を良い方向に巻き込んでいくということですね。

佐久間　そうね。職員さんとかグループの人とか様々な人々を巻き込んでいくとかね。そういう部分で力をもっていかないと。

降　幡　たとえば、公民館の使い方ですけど、1週間に1回使って「はい、さよなら」だけだと、公民館の方も顔は知っていても名前は知らない、それじゃ利用者の方の怠慢ですね。実際私は職員と一緒にということを大切にやっていましたけれども、2年前からちょっと休んでいて、久し振りに復帰してみると職員を巻き込んでるということがなくなっていた。社会教育とか公民館ということはどういうことか、全然いまメンバーの中に浸透していっていない、ただ土曜日に来て、自分達の活動だけして帰るになってしまっている。やっぱり私の責任ですね。これはもっとＰＲもしなければいけない、「公民館とはこういうところ」「公民館ってこういうふうにしてできたのよ」ということを、今度ちゃんとまとめて、ある時期に伝えていく使命があるなと、いますごく感じています。

宮　岡　初めのころは公運審でも、それ以外のところでも、権利とか、学習権がどうのとか、よくそういう声を聞いていました。私は、社会教育というのは義務教育と違ってね、権利、義務の問題じゃないと思うんです。自分たちが何を活動の中で産み出していくかが問われている学習であって、権利や義務の問題じゃないと思うんだけれども、どうなんですか。やはりそういう点が大事だと思います。利用する以上はね。カルチャーセンターで月謝を払って勉強しているのと同じでは、お金を払わないだけが違うのでは困るじゃないかとね。専門家としてはどうでしょうか。

奥　田　そうですよね。

宮　岡　どこか本質的なところでカルチャーセンターと違わないとさ。もし、ここを利用する

だけたったら、月謝払わないだけの違いでしょ。それ以外にどこに違いがあるのかと言われたときに、その辺のところを利用者としてもこれから先、十分考えていかないといけないんじゃないでしょうか。

それが結局は社会教育を発展させていくということにもつながっていくと思うんですよ。これをないがしろにしたら、社会教育はね、これから法律も変わりかねないときに、それでは困ります。そういう時代にきちっとした姿勢を示せるように、利用者側の方で自覚しないと。

村　野(婦)　そういうふうなところでは佐久間さんが公民館運営審議会委員をされてたとき出していた「うんしんおばさんだより」は社会教育とは降幡さんが言われたみたいな視野の狭い、自分たちだけの活動に閉じこもらないようにするにはどうしたらよいのかを、非常に明確に出し続けてくれたというところで、その辺の御苦労をお聞きしたいですね。

佐久間　私の中では苦労してませんよ。公民館での楽しい体験や感動をみんなと一緒に感じたいという思いがとてもあったのね。だから私が少しずつでもわかったところを、みんなも一緒にわかろうよという気持があった。生意気だけれども、そういう気持がすごく大きかったと思うの。

私もやっぱり公民館を使っていて大事だなと思うところは、人としての感動というところじゃないかとこのごろ思い始めたの。何をやっても感動があるというのは大事なのね。続ける原動力でもあるし、活動を振り返るひとつの大事な要素でもあるし、感動し続けながら生きていくためのひとつの位置づけに、私は公民館を選んでいるんだけれど。

たとえば小さなことでも、グループで一緒に紅茶を飲むでしょ。「みんなで飲むとおいしいねぇ」という言葉を常に言い続ける。みんなですると楽しいね。というそういう部分をつなげていける力を公民館は持ってると思うから。それは同じ地域の人が、あの人も知っていてこの人も知っている、隣同士みたいな感覚で寄り集まっているグループだからこそできるんであって、やっぱりカルチャーセンターのような部分ではないと思うの。

司　会　そのまちの、その地域の人達と一緒に感動したり、考えたりしていくことが公民館活動の基本ということですか。

それでは最後になりますけれども、これからの公民館についてお伺いいたします。公民館のあり方。公民館がどのようにすれば、福生の文化をつくるための一機関になれるか。これからの社会教育の未来等につきまして、お話をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

降　幡　そうですね。ほんとにさっき宮岡先生がおっしゃったように、異年齢の集まりが大切

ですね。

たとえば子育てについて、先輩にこんな悩みあるなんていうと「あら、それはこうなのよ」とか「心配ないわよ」とか返ってくる。そういうつながりは、さっき宮岡先生がおっしゃったみたいに、異年齢との中でこそあるんですね。うちのメンバーの一人が、家にいると子供と1対1でいるだけだけど、ここに来るとみんな仲間がいるという意識が持てるというのは幸せだと、それが持ちたくて来たという人もいるのね。

宮　岡　奥田先生に伺いたいんだけれども、これからの公民館は、どういったらいいんだろ。

たとえばね、二者択一として、学習層を広げてゆくことと、それから学習者の質を高めることと、どちらをまず優先すべきなのか。

これは専門家にぜひ伺っておきたい。どっちとも言えないといえばそうでしょうけれども。

奥　田　その専門家の話というのは、大抵おもしろくないんですよね。

宮　岡　そうでしょう。それでも伺いたい。（笑声）

奥　田　それでも言わなければならないのが専門家の辛いところで・・・。（笑声）

結論的に言うと、いまどちらかというようには決めつけて言えないという感じもするんですが、ただ、ぼくはいまの時点で大事なことは広がりだというふうに考えているんですけれどもね。もっともっと広がりを追求しないといけないんじゃないかという気がしているんです。

深まりというのはその人の努力で深まることがあるわけです。そのときに、深まりたいんだという要望にも応えてほしいという意味では、深まりもほしいんですよね。だけれども、いま公民館が第一義的に追求する、公民館の職員とか、あるいは公民館をいままで使って自分が世界を広げてきた人たちが責任として追求しなければいけないのは、いまは広がりじゃないかと思っているんです。

宮　岡　いや、どっちともいったら反論しようと思っていました。

ものごとには、手法の上からいけば優先順位がありますよね。それでいけなければ力の入れ方が。両方なんていったら空論だって言おうと思ったのに、言えなかった。

奥　田　やっぱり特に職員にお願いしたいことと言えば、広がりということでしょうね。

宮　岡　質の深まりは、学習の結果であってね、その深まりの速さというのは、本人の努力とか、職員の協力とかがいるでしょうけれども、少なくとも結果であることには違いないと思うんですよ。そういう意味では、広がりというのは地域ということを念頭においての社会教育の発展ということを考えれば第一優先でしょうかね。

奥　田　そう思いますね。

もう一言つけ加えさせていただければ、これはさっき宮岡先生もおっしゃっておられましたけれども、やっぱり広がりというのは公民館へ足を向けられる人を広げるという広がりと、職員が公民館から外へ出かけていってもっと広い意味での半径をつくってもらえるような広がりとがあって、そろそろ後者の時期にこないといけないという気はするんですね。

司　会　あとグループ活動などをしていて、公民館にこうしてほしいなということがあるのでしょうか。

降　幡　具体的なことなんですけれどもね、サークルにどんなことをしているのかなというように、気軽な形で顔を見せていただくということはいいんじゃないかなといつも思うんですよ。

たとえば、館長さん職員さんがかわられてもメンバーは知らないわけですね。リーダーになる人さえも知らなかったと。そういうことはこちらからもいかなければいけないと思うんですけれども、職員の方からも御紹介いただけるとありがたいですね。かわられたときにサークルに御足労いただいて、お顔見せていただくとか、そうするとメンバーの方もあの方が館長さんなのかということがわかり、親しみがわきますよね。

司　会　できるだけですね、勉強の最中に御迷惑にならないようにして、できるだけ出させていただきたい、こんなふうに思います。

奥　田　やっぱり降幡さんのおっしゃられたつながりということは大切だと思いますね。こんなグループがこんなことを言っているよ、こんなグループはこんなことをやっているよ。だから一緒にやったらどうですかとか、そんなつながりを図る役割を職員に望みますね。

たとえばコーラスをやれば、それはそれで一定程度楽しめるし、だれでも自分のやりたいことだけをやって帰ることにどうしてもなりがちですが、先ほども降幡さんが市民コーラスの定期発表会のところでおっしゃいましたように、視野が広がった段階で、またコーラスが楽しくなる。

その質の違いというのは経験しないと納得できませんからね。そういう意味で地域でいろんな活動をしていらっしゃるグループとつながっていただくと、いいんじゃないかなという気がします。

広がりというのは、一番その部分を強調したいですね。長い経験でいうとそうなんですけれどもね。

村　野(米)　なかなか人間性が広くないと、これができないですね。そのためにも公民館でいろいろなことを学んでいるんですけど。

佐久間　もし私が職員だったら、おばさんだよりじゃないけれどちょっと来たグループに、メ

モでもいいから、こんなグループが今度これやりますよって伝えたい。パンフレット立においてあるのを、気がついた人だけが持っていくんじゃない部分の広がりをつくりたですね。たとえば市民コーラスさんを通じて、私たちが知り合ったバッカスさんや、いろんなグループさんにも私たちは私たちなりにいろんなことをＰＲしてます。

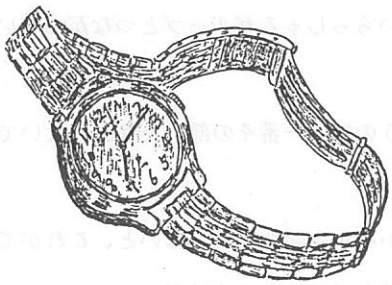
私たちが知らない部分を、そういう形で知らせるのは、職員の方が簡単にできるんではないかな。もし私が職員であれば、ちょっとやってみたいなという部分ですね。余計なことながら、そうするとそれを見た人が「ああ、何かやるんだって」とその職員さんに話しかけるかも知れないし、夜のグループと昼のグループをつなげるキッカケになると思うんだけれど。

そうすると、ひとつの情報が入る。ということはよそのグループにも目を向けるきっかけにならないかなと思うんですけれどもね。

司　会　そうですか、主催の教室や講座をやるだけではなく、公民館が人と人とをつなげる場所になっていかなくてはいけないということですね。

それでは、まだまだお話を伺いたいのでございますが、予定の時間がまいりましたので、この辺で座談会を終わらせていただきたいと思います。

大変長時間にわたり、貴重な御意見をいただきましてありがとうございました。

これからも、よりよい公民館づくりを目指して努力してまいりたいと考えておりますので、どうか今後とも、よろしく御指導のほどお願い申し上げます。

本日は誠にありがとうございました。